

西成地域 日雇労働者
の
就労と福祉のために

VIII

44年度事業の報告

目次

＜表 紙 裏＞ 関係地域略図

ま え が き	理 事 長 芦 田 泰 三	3
愛隣地区の現況と沿革		4
事 業 報 告		6
組 織		46

關係地域略図



早朝の就労風景 — 求人バスとこれに集る労働者



上のカット・西成労働福祉センターの創設に
左藤大阪府知事より贈られた扁額

ま え が き

本年3月15日から9月15日までの6ヶ月間にわたって、大阪千里ヶ丘で、アジアで最初の万国博覧会が開催されている。会場の面積は330万平方メートルで、甲子園球場が80も入る広さだそうである。政府は6,500億円という膨大な関連公共事業を決定し、その工事は急ピッチで完成した。あいりん地区の労働者も直接間接を問わず、相当数の者がこの事業に従事した。そして万国博覧会を訪れる観客は6,000万人を超えるであろうといわれている。

昭和44年度の国民総生産は、名目で59兆9,022億円となり、経済成長率は、実質で12.5%の高い伸びを示した。その結果、わが国の経済規模は自由諸国中で、米国に次ぐ世界第二位となった。この高い経済成長の裏に、各産業に投じた労働力を見のがすわけにはいかない。昭和44年度中に、当センターを通じ、各産業に就労したあいりん地区の労働者は76万を超えている。

過去の足跡をふりかえり、明日の力強い前進への糧ともしたく、ここに昭和44年度事業の実績を集録した。当地域の労働福祉対策は特殊な社会問題もからみあい、なかなか簡単に解決されるべき問題でもない。

幸い、本年9月から、新しく完成する、あいりん総合センターに、当財団も移転する予定である。それを機会に、昭和37年10月当財団発足以来満8ヶ年の残された実績をかみしめながら、関係機関の助成とご協力、また社会各方面のご支援を期待し、面目一新、愈々、地域の労働福祉開発に邁進する所存である。

どうか、今後とも、倍旧のご支援とご鞭撻をお願い申し上げますと同時に、特別なご配慮にあずかった関係各位に対し、ここに深甚の謝意を表する次第である。

昭和45年7月20日

財団法人 西成労働福祉センター

理 事 長 芦 田 泰 三

愛隣地区の現況と沿革

I 「釜ヶ崎」から「愛隣地区」へ

釜ヶ崎が広く社会的注目を呼んだのは、昭和36年8月1日に発生したいわゆる「釜ヶ崎騒動事件」以来のことである。これが契機となり府・市・警察が中心になって、従来この地域に対する対策が放置されていたことを反省し、新たな対策の一步が踏み出されることとなった。

しかし、その後も地域が内包する複雑な社会問題が大小様々な形で顕在化し、昭和41年5月28日には「第二次釜ヶ崎騒動事件」とも言える大規模な騒動が生じ、改めて地域対策の一層の充実を社会に喚起した。この時、同年8月の府市連絡会議において、従来「釜ヶ崎」の名のもとに一般社会から差別・誤解を受けているのを改め、また地域特別対策の及ぶ範囲を明確にする等の主旨で、以後「釜ヶ崎」の呼称を変更して「愛隣地区」と統一することが申合され新聞発表された。

愛隣地区に指定された地域は、従来ドヤ街の性格の濃い東田町・東入船町・西入船町・甲岸町・海道町・東萩町一帯を釜ヶ崎（狭義の釜ヶ崎とも言われた）と呼んでいたのに対して、範囲を拡げて東四条・山王1～4丁目・今池町・曳船町までを含むことになった。

もともと、呼称変更に対して、マスコミ・識者・一般世論から批判がされたように、釜ヶ崎対策は単に呼称変更をもって代えられるものではなく、具体的に地域の実態に即して関係機関・施設・施策を改善・強化し、必要な予算と人的資源を投入しなければ単なるレッテルの張り替えになるであろうとの指摘は、常に肝に銘じておかねばならないのは言うまでもない。

II 愛隣地区の現況

愛隣地区は、大阪市西成区の東北端に位置し、すでに述べた13町・丁よりなり、その面積は0.62K㎡である。

人口は、住民登録・未登録を含めて約4万5千人で、大阪市の平均1.0K㎡につき1万5千人と比較すれば過密の激しさがわかる。このうち約1万8千～2万人が職人を含む日雇労働者と推定され、また暴力団体30に属する役員・遇連隊等が1,790人と西成警察署は調査している。

日雇労働者が利用するドヤ（簡易宿所等）は、ここ数年来新築・増築・改築のブームを呼び、軽量鉄骨5～6階建て宿泊定員300～400人といった大型のものがネオンをつけて続出している。中には冷房・エレベーター付きといったものまであらわれている。

しかし、新築のものでも1室1畳のものがほとんどで、料金は1日200～300円、3畳になると350円はかかる。また、中には非常口・非常階段・非常ベル等の設備が不備であったり、通風・採光の悪いものがあり問題を残している。

つぎに、この地区の特徴として、ほとんどの者が外食によるため飲食店が極めて多く、また重労働・疎外された生活によるため、それを酒でいやす者が多いため酒屋（主に立飲み屋）が多く、いずれも増加の傾向にある。

西成警察署の調査による宿泊施設、飲食店等の数はつぎの通りである。

(a)宿泊施設等

簡易宿所 227、日払アパート 42、旅館 47、一般アパート 279、バラック 27、共同住宅 7、

(b)飲食店等

立ち飲み屋（スタンド）152、酒類販売業 28、食堂（中華料理含む）15、ホルモン屋 26、喫茶店87、すし屋 37、カフェー 10、小カフェー 6、料理屋 1、小料理屋 96、お好み焼屋 36、パチンコ店 10、Zゲーム 2、ゲームコーナー 4、マージャン 19、移動遊技 5、質屋 22、古物商 364、金属くず商 12、金属くず行商 73、

この地区には犯罪の多いのも特徴である。西成警察署昭和44年度の資料によると、刑法犯1,439件発生（43年度1,396件）、風俗営業等で犯した特別法犯577件（同1,161件）、その他暴力団組員の犯罪250件、銃砲刀剣類不法所持72件、労働者相手の街頭賭博47件、競輪ノミ行為18件、労働者相手の路上強盗96件等があげられている。

同資料による各種保護取扱いは、迷子170、家出人47、行路病人1,199、変死人90、精神病患者（アル中を含む）184、泥酔2,648となっている。

III 釜ヶ崎の沿革（戦前）

愛隣地区（その一部分）が「釜ヶ崎」と呼ばれ約70年の歴史をもつ。もともと、釜ヶ崎一帯は、江戸時代より畑場八カ村と呼ばれる有名な蔬菜地帯の一つの今宮村の一部を成していた。虫が鳴き、カッコウ鳥も鳴くのどかな農村であった。こうした風景は明治中期まで続き、綿・ねぎ・人参・しろ瓜・麦・藍・甘藷等が今宮村の産物として消費地大阪の需要に添えていた。

明治後半になると、日清戦争（明治27）、日露戦争（明治37）を経て日本資本主義の成長とともに、農村から都市への人口の吸収・集中が進んだ。大阪市も商

工業都市として栄え、その反面乞食・浮浪者ら日雇・土方・下級職人・労働者等の貧困者が大量化し、恒常化し、これらが市街地周辺にスラムを形成していった。中でも当時の大阪南端の名護町（長町）のスラムはその典型であった。

そして、今宮村も当然この影響を受けて市街地化が進み、他方今宮村北部の紀州街道（住吉街道）沿いに漸次貧困者が定住するようになった。それでも、明治35年頃までは、旅人相手の八軒長屋、後に下層労働者用の宿・長屋がひっそりと存在していた位である。

もともと、大阪市内におけるスラムとしては、江戸時代からの歴史をもつ名護町、今の浪速区日本橋3～5丁目に至る細長い地域があり不良環境地区を形成し、貧困者のふきだまりとなっていた。

ところが、明治36年に第5回内国勸業博覧会を大阪の今の天王寺公園・新世界一帯で開催することになり、堺筋道路の拡張と博覧会々場に通じる沿道の名護町は体裁が悪いとして、これを取払うため、明治31年4月府令36号で大阪府の宿屋取締規則を定め、「木賃宿は大阪市・堺市に於て営業を許さず」とした。そして木賃宿は関西線を越えて紀州街道沿いの入船地区（釜ヶ崎の中心部）に移り、同時にこの一帯に追われ行く貧困者が住みついたのである。

日露戦争、第一次世界大戦を経る中で、当然のこと景気・不景気を繰返し、失業者、貧困者が大量に創出されていった。一方、近くには、江戸時代から飛田刑場で刑の執行をさせられていた未解放部落、また渡辺（西浜）の未解放部落があり、人々は差別と貧困を強いられていた。他方、前述した博覧会々場跡に新世界観楽街が生れ、大正7年には飛田遊廓が開かれ、また南海電鉄の本線と阪堺線が敷設・拡張される等々といった状況の中で、釜ヶ崎は膨張し、大正末期には全国各地から追われ没落していった人々を沈没させた本格的なスラムを形成するに至った。

そして、大正7年8月に富山県の一漁村の主婦が中心になって「米よこせ」を叫んで立上った米騒動の波はすぐに大阪にも押し寄せてきたが、その大阪での最初の米騒動は釜ヶ崎の木賃宿45軒の労働者2,700人をはじめとする今宮町住民の逢起であったことからもうかがえるように、釜ヶ崎はすでに日本資本主義発展途上の矛盾を大きく受けていたのである。

また、武田麟太郎の小説「釜ヶ崎」（中失公論・昭和8年3月）の冒頭は、よく知られているように「カッテ、幾人カノ外来者ガ、案内者ナクシテ、コノ密集地域ノ奥深く迷ヒ込ミ、ソノマ行先不明トナリシ事アリシト聞ク」とあるが、続けて昭和初期の釜ヶ崎を

描写して「……釜ヶ崎はミガード下」の通称があるように、恵美須町市電車庫の南、関西線のガードを起点としてゐるのであるが、さすがその表通は、紀州街道に沿ってゐる皮肉にも住吉界あたりの物持が自動車で往き来するので、幅広く整理され、今はアスファルトさへ敷かれてゐる。それでも矢張り他の町通と区別されるのは五十何軒もある木賃宿が、その間に煮込屋、安酒場、めし屋、古道具屋、紹介屋などを織込んで陰鬱に立列んでゐるのと、一帯に強烈な臭気が——人間の臓物が腐敗して行く臭気が流れてゐることであらう。」と述べている。

かくして、釜ヶ崎に堆積した貧困者群は、ある時は低賃金労働力の供給源として、またある時は老廃した労働力の廃棄場所としてミゼラブルな歴史を形成してきたのである。

第二次大戦中は、徴兵、国家総動員で目に見える失業者はなくなり、釜ヶ崎には、老人、婦人、子供、とあとは兵力・労働力に耐え得ない障害者等が取り残される形となった。そして、大戦末期の空襲で地域一帯はそのほとんどを焼失した。

IV おわりに

後の資料でもわかるように、この地区には豊富なエネルギーな労働力が集中している。彼らの中には反社会的行為に走る者もいるが大多数の者は、日々自らの全力を使い尽くして生活をしているのである。

ここで、この地域の日雇労働者の血と汗の結晶が社会に大きな貢献をしてきていることを試算しておこう。毎日1万人が稼働し、1日平均の賃金が2,000円とすると、1日で2千万円、1ヵ月で6億円、1年で72億円になる。これを生み出した価値に直すとこの数倍になる。彼らに対する社会的評価が正され、対策の強力な充実が主張されるゆえんの一つである。

「福祉国家」が叫ばれる今日なお、ここにはまだ光がさしていない。西成労働福祉センターも、昭和36年9月1日の大阪府労働部西成分室の発足（「センター」の発足は昭和37年10月1日）から計算すると10年を経た。以後、地域の労働福祉に誠心誠意努力を重ねてきたが、その成果は十分ではなく、残された課題の多いことを痛感している。

しかし、来年度には、労働省、大阪府・市が協同して、地域の総合的福祉施設が発足を間近かにひかえている。これが、今後の地域対策の先端を荷負って社会的・歴史的責任の一端を果たして行くことになる。今後一層、関係機関・施設・団体の御指導を切にお願いしないわけにはいかない。